

第1節 未来に生きる子どもに対する大人の期待

出口保行・近藤俊明

要約

本節の目的は、未来に生きる健やかな子どもに対する大人の期待を明らかにすることである。本研究では、単に調査を行うだけではなく、大学の地域連携活動の一環として東京未来大学リエゾングループという乳幼児の保護者の会を組織し、その中で現在の子育ての難しさや苦悩、そして喜びなどを話し合いながら地域住民とともに子育てについて考える機会を共有した。また、未来に生きる健やかな子ども像とはどのようなものであるのかについて討議する中で、現在の保護者が子どもに何を期待しているのかについて広く実態調査を行いたいという機運が高まり、メンバーが主体的に活動して調査を実施したとともに、東京未来大学リエゾングループの活動内容をさらに社会に問いかけ、広く門戸を開く意味でのシンポジウム開催も行った。

キーワード

リエゾングループ 未来に生きる子ども像 シンポジウム 攻める防犯

1. はじめに

人口動態統計の年間推移（厚生労働省、2010）によると、合計特殊出生率（当該年次の15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、一人の女性が当該年次の年齢別出生率で一生の間に生むとした時の子ども数のこと）は、1975年に2を切って以降、減少傾向が顕著であり、最新の統計値が算出された2008年の数値は1.37となっている。このように出生数が年々減少する中、一人ひとりのこどもを手厚く監護し、育成することが可能となっているように思われるが、一方で、子どもを取り巻く環境はより一層厳しくなっていることも事実であり、子育てに苦悩した挙句、虐待や最悪の場合子殺しに至る事例も後を絶たなくなっている。

法務総合研究所(2009)は、子どもの犯罪被害について表1のとおり暴行・傷害という暴力犯罪被害が大幅に増加していると報告している。とりわけ女子の場合、強制わいせつで89.7%、略取誘拐で70.7%、暴行で45.8%と性暴力被害に遭いやすい傾向が明確であり、こうした犯罪から子どもを守りつつ、明るく健やかな子どもを育てるために何をすべきかという親や関係者の苦悩は尽きることなく続いている。

現在は犯罪多発時代と言われており（法務総合研究所、2004）、我が国の犯罪はまれに見るほどの増加を続け、犯罪被害は決して他人事ではなくなっている。刑法犯の認知件数の増加は、図1に示すとおりであり、1997年頃から急増を始め、2002年には史上最高となっている。犯罪件数が増加すると犯人逮捕に至る事案が少なくなり検挙率が低下するという現象を引き起こし、犯罪をしても逮捕されないことになるので、一層犯罪が多発するという悪循環に陥ってしまう。その後、2003年には、政府が官邸を中心とした犯罪対策閣僚会議（2003年9月2日閣議口頭了解）を招集し、犯罪防止対策について様々な施策を講じたことにより、犯罪数が減少には転じたものの、いまだ犯罪が多発していることには変わりはない。そうした身近に危険を感じる社会で子育てを行う現在の保護者の心配や苦悩を察することは決して難しいことではない。

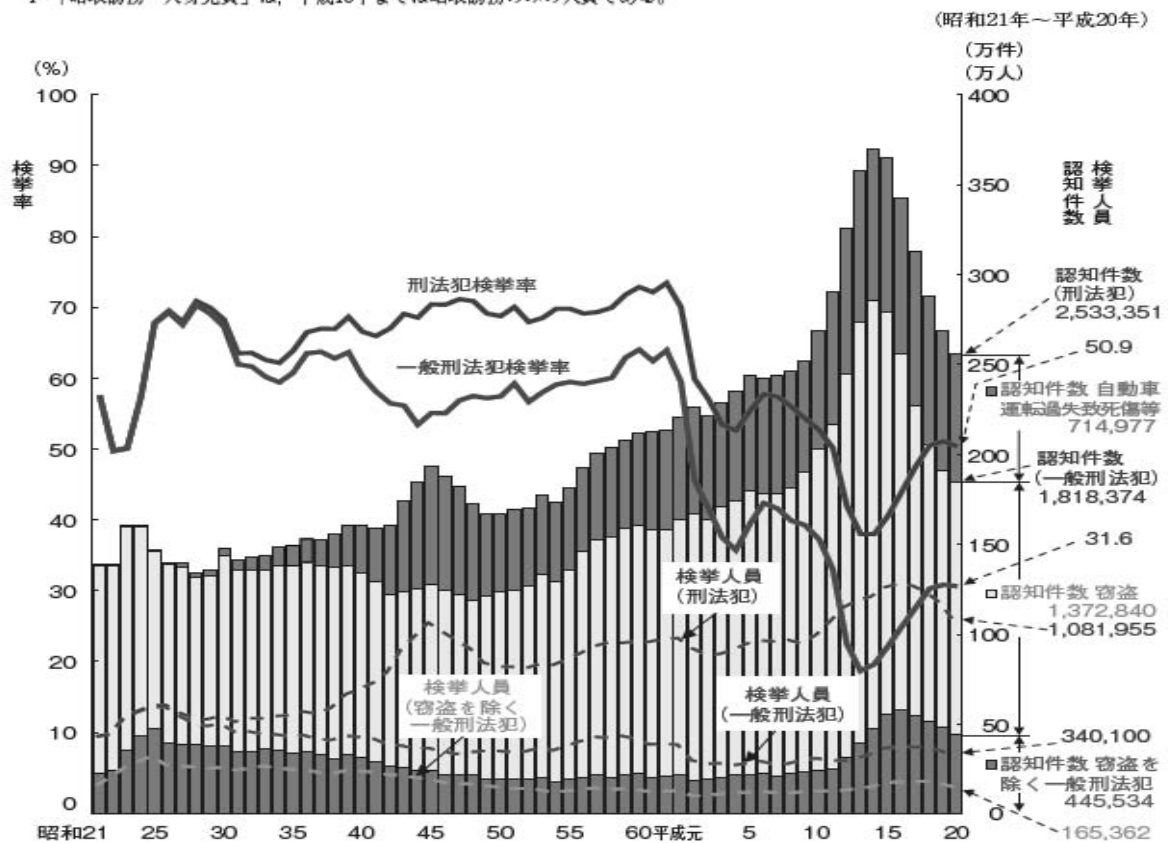
表 1 13 歳未満の子どもが被害者となった刑法犯の主要罪名別被害者数

(法務総合研究所、2009)

(平成11年～20年)

年次	総数		殺人		傷害		暴行		恐喝		強姦	強制わいせつ		略取誘拐・人身売買	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子		男子	女子		
11年	2,805	1,806	87	43	206	61	221	149	735	80	65	1,391	1,324	100	84
12	3,621	2,196	100	47	338	100	477	272	851	89	72	1,668	1,528	115	88
13	4,377	2,719	103	49	450	150	630	377	1,006	109	60	2,037	1,905	91	69
14	4,077	2,575	94	47	467	151	724	401	779	114	90	1,815	1,689	108	83
15	4,555	2,972	93	43	536	177	945	536	668	91	93	2,087	1,926	133	106
16	4,295	2,638	111	59	615	217	1,115	600	560	60	74	1,679	1,519	141	109
17	3,704	2,256	105	49	546	167	1,136	588	357	35	72	1,384	1,275	104	70
18	3,142	1,819	110	48	553	160	1,055	537	256	36	67	1,015	911	86	60
19	2,844	1,594	82	36	529	163	933	427	230	15	81	907	814	82	58
20	2,718	1,565	115	52	472	145	867	390	194	25	71	936	839	63	43

- 注 1 警察庁の統計による。
 2 一つの事件で数人の被害者がいる場合は、主たる被害者について計上している。
 3 「総数」は、この表に掲げた犯罪による被害者数の合計である。
 4 「略取誘拐・人身売買」は、平成16年までは略取誘拐のみの人員である。



- 注 1 警察庁の統計による。
 2 昭和30年以前は、14歳未満の少年による触法行為を含む。
 3 昭和40年以前の一般刑法犯は、「業過を除く刑法犯」である。

図 1 我が国の刑法犯認知件数等の推移 (法務総合研究所、2009)

また、警察庁 (2010) の報告によれば、児童虐待の経年変化について、加害者側の検挙件数及び検挙人員を見ると、どちらも最近 10 年間で約 1.7-1.8 倍となっており、増加の一途をたどっている。また、これに伴い、被害者側の児童数も、同様に増加している。また、こうした公的に

認知されない暗数も含めるとさらに多くの児童虐待が発生しているものと推測されている（法務総合研究所、2008）。

こうした児童虐待の加害者と被害者の関係を見ると（法務総合研究所、2009）、検挙人員全体では父親によるものが多いが、殺人及び保護責任者遺棄致死においては母親等によるものが80%前後と多くなっており、児童虐待の中でもとりわけ生命犯といわれる人の命を奪う重大犯罪となると、母親に過重なストレスがかかり子どもを死に至らしめることとなりやすいことが浮き彫りにされている。

以上のように、子どもを取り巻く環境は犯罪という面からみても非常に厳しくなっていることは明らかであり、もちろんそれ以外の要因としても子どもの教育や将来の社会生活に関する不安等も増加していることから、現在子育てを行っている保護者が何を気遣い、何を子どもに求めているのかについて調査する必要性は高い。

本研究に着手した当初は、子育てに関し、包括的で概括的な調査を行うことを視野には入れたが、それよりもむしろ、現在子育て中の保護者から直接意見を聞き、不安や希望などを具体的に明らかにする、最終的には、その保護者たちが相互扶助を行えるような組織作りを考えた方がより実践的で実効的であるという考えから、東京未来大学の周辺に居住する住民から直接意見を聞ける場を設定することを考えた。

2. 東京未来大学リエゾングループ

(1) 東京未来大学リエゾングループの組織

現在子育てを行っている保護者が、当該子どもの養育に関し一体どのような不安を抱え、どのような期待を持っているのかを明らかにするため、東京未来大学リエゾングループ（以下、リエゾンGという）を組織した。

このリエゾンGとは、東京未来大学の地域連携活動の一環として、周辺住民と協力して子育てを支援する目的で組織されたものである。東京未来大学こども心理学部教授近藤俊明（以下近藤という）、同出口保行（以下出口という）が中心となって組織作りを進め、周辺地域で現在乳幼児を子育て中の保護者に対して、大学行事などを使って積極的に声掛けを行い、組織作りを推進した。しかし、組織作りは当初からスムーズに進行したわけではなく、本研究が開始されてしばらくの間は構成メンバー集めに奔走し、徐々に人数を拡大しながら、第一回の開催が可能となった。現在までのメンバーは全て女性（子を持つ母親）であり、年齢的にも20歳台ないしは30歳台である。

リエゾンGは、メンバーが一堂に会して行う会議形式を採り（以後、リエゾン会議という）、毎回東京未来大学を会場として、概ね月に一度の頻度で開催し、現在までに合計16回開催した。開催の様子は写真1及び写真2で示した。また、その概要は、表2に示したとおりである。なお、リエゾン会議開催の合間も、適宜インターネットメールを用いた稟議を行い、意思統一や意思決定、あるいは情報交換を頻繁に行うように心がけていた。

毎回のリエゾンG会議の開催に当たっては、当初こそ大学教員が主導していたものの、地域の中にリエゾンGの活動を根付かせるために、徐々にメンバーが主導して会議を進行するように方向付けを行った。メンバー自身が、現在の自らの子育てに関し疑問に思うこと及び心配なこと等

第12章 未来に生きる健やかなこどもの姿

をお互いに関陳し、それについて討議するというフリーディスカッション方式を採用した。ただし、必要ある際は、大学教員が適宜のアドバイスを行った。

先述したとおり、メンバーは、大学周辺地域に居所のある者ばかりであるが、この地域は最近になって大規模区画整理が行われ、新たに集合住宅が林立したところであり、以前から住んでいた者は一人もいない。したがって、大学周辺地域の近隣住民と言っても、お互いに面識があるものはごくわずかであり、このメンバーとなり活動することによってお互いについて知ったものばかりである。したがって、居住しているエリアが同じというだけで他には接点が少なく、子育てに関する悩みや不安を共有する相手を見つけないという気持ちが背景にあったものと推測される。

メンバーは全員、乳児・幼児の母親であり、現在子育ての最前線にいる者ばかりである。幼い子供を連れてのリエゾン会議参加は、非常に困難であるので、毎回東京未来大学こども心理学部の学生数名をボランティアとして募り、プレイルームにおいて預かり保育を行うことにより、メンバーが会議に集中して取り組める環境を整備した。



写真1及び2 リエゾングループ会議の様子

(撮影日：上：平成22年8月27日、下：平成22年11月15日)

表2 東京未来大学リエゾングループの開催日時及びその概要

開催回数	開催日時	参加者数（人）	概 要
1	平成21年11月2日	6	リエゾングループの趣旨説目。今後の方向性の検討。
2	平成21年12月2日	8	メンバーの自己紹介及び子育て観報告。
3	平成22年1月18日	10	メンバーの自己紹介及び子育て観報告。
4	平成22年2月15日	8	子育てアンケートの実施に関する質疑応答。
5	平成22年3月15日	10	子育てアンケートの実施に係る調査項目検討。
6	平成22年4月19日	9	子育てアンケートに係るアンケート形式のブラッシュアップ。
7	平成22年5月17日	8	子育てアンケートに係るアンケート形式のブラッシュアップ及び調査対象者の検討。
8	平成22年6月14日	7	子育てアンケートに係る調査項目検討及び調査対象者の検討。
9	平成22年7月26日	7	子育てアンケートに係る調査項目の検討及び実施方法の検討。
10	平成22年8月27日	8	子育てアンケート実施上の問題点の洗い出し。データ入力に関する事項。
11	平成22年9月16日	7	シンポジウム開催に関する時期や内容についての検討。
12	平成22年10月18日	11	シンポジウム開催に関する内容の検討。
13	平成22年11月8日	9	シンポジウム開催に関する実施方法の検討。
14	平成22年11月15日	7	シンポジウム開催に関する進行確認及び役割分担の検討。
15	平成22年12月2日	6	シンポジウム開催に関する諸準備。
16	平成22年12月6日	10	東京未来大学リエゾングループ主催（足立区危機管理室後援）東京未来大学シンポジウム「子どもを守れー攻める防犯ー」開催

(2) 東京未来大学リエゾングループの活動

当初、リエゾン会議では近藤、出口という大学教員が主導し、メンバーの子育て上の不安や悩みをヒアリングする中で、適宜のアドバイスを行うなどしながら会議の趣旨を説明しつつ、最終的にはリエゾンGが地域の子育て活動として根付き、そして自立できるような方向付けを行った。

開始間もないころは、リエゾンGという組織自体に懐疑的で、大学が一方的に調査や実験を行う場ではないかという不信もあったが、回数を重ねるごとにそうした不信は払しょくされていった。次第にメンバーがお互いの子育て観や子育てに関する不安を開陳し、それを相互に共有したり、相互にアドバイスを行うということが繰り返されるようになった。こうした経過をたどる中で、メンバーは、現在の同世代の子育て中の保護者たちがどのような子育てを行っているのかについて興味を持ち始め、さらに討議を進める中で、一歩進めて、現在の他の保護者たちが自らの子どもが将来的にどのように育ててほしいのかということに興味集中するようになった。リエゾン会議の中では、近藤の専門領域が臨床心理学、とりわけ不登校などに係るスクールカウンセリングであることや、出口の専門が犯罪心理学、とりわけ犯罪者分析や防犯指導であることから、将来子どもが学校社会で適応していくことができるのかや犯罪被害に遭わないようにするために親は何をすべきかということも頻繁に話題に上がった。

第3回目のリエゾンG会議からは、話題の中心が子育て中の保護者に対する調査について移行していった。当初は、自由記述でデータを収集する、リエゾン会議にゲストとして他の保護者を招いて話をしてもらい、個別の面接法で資料を収集するなど様々な意見が出されたが、大学教員の助言もあって、アンケート調査実施の方向で話が収束した。

第4回から第9回目のリエゾン会議では、アンケート調査の項目についての検討やアンケート調査の実施方法などについて具体的に話し合いが行われた。リエゾン会議で検討された調査項目を近藤が調査票としてまとめ、リエゾン会議で試行を繰り返しながら、調査票をブラッシュアップする作業が続けられた。平成22年8月の「未来に生きる子ども像」調査の実施をはさんで、第10回目の開催では、実施しての問題点の洗い出しや対処方法について検証が行われた。第10回目の開催で討議されたアンケート調査の問題点や課題は、知己の少ないエリアだけに手交による調査依頼をすることの難しさや、夫婦そろっての回答を回収することのむずかしさ、調査内容についての質問を受けた時の返答内容等についてが指摘された。アンケート調査の詳細は、(3)で詳述する。

その後、第11回目からは、リエゾンGとしての情報発信に話題が展開し、15回目までは、様々な形での情報発信方法が検討された。その中で、インターネットによるホームページ作成や、地域児童館を使った催事の開催等様々な意見が出された。最終的にはシンポジウムの開催という方向性が示され、全員で取り組むという合意が得られた。第16回目に東京未来大学リエゾングループ主催（足立区危機管理室後援）「子どもを守れー攻める防犯ー」の開催を行った。シンポジウムの詳細は、(4)で詳述する。

こうした活動を通して、メンバーはお互いの子育て観を確認しつつ、一概に子育て、あるいは未来に生きる子ども像に関して様々な考えや価値観があることを知るようになった。大学教員にとっても、現在の保護者が子育てに関し、どのようなことに苦悩し、また、どのような期待を抱いているのかについて知るよい機会となった。

(3) 未来に生きる子ども像に関する調査

① 調査実施までの経過

第 3 回目以降のリエゾン会議で話題となった、現在子育て中の保護者を対象とする調査について、当初は、周辺住民に対する対面インタビュー法を用いた聞き取り調査の実施や自由記述法によるアンケート調査の実施などが検討されたが、いずれ結果を集約することの難しさが指摘され、最終的にはアンケート調査を行うこととなった。

アンケート調査は、子どもに対する期待を中心に、地域や学校で期待することなどを調査内容とし、アンケート調査の題名は、最終的に「未来に生きる子ども像」とした。

調査項目については、リエゾン会議において子どもに期待すること等についての観点出しが行われた。かなり広範な質問項目が挙げられたことから、その整理方法として KJ 法(川喜多、1968)のように、似た質問項目を整理統合していく作業を繰り返した。この作業にはかなりの時間を費やしたが、最終的には、自由記述 2 問を含む 15 問の調査票が作成された。調査項目や回答方法については、③結果-2) 調査結果を参照されたい。

本調査票については、主としてリエゾン G メンバーが作成したいわゆる実態調査に近いものであり、心理学や社会学等の学術的理論を反映した構造的なものではないが、現在の保護者の現状を把握するという意味では非常に意味のある、有意義な情報が収集できると考えた。

② 調査方法

1) 参加者

基本的には東京未来大学の周辺住民で、未就学児童を子として持つ保護者 200 名程度に参加を求めた。できれば、父親、母親、それぞれから回答を得られるようにした。

2) 器具

未来に生きる子ども像アンケート調査票(以後調査票という)。調査票は回答のしやすさを考慮して、なるべく個人情報に触れるところは質問せず、男女の別、職業だけをフェイス情報とした。質問により単一回答あるいは上限のない複数回答を用い、自由記述回答も 2 問含めた。各調査票にはインフォームドコンセントを添付した。

3) 手続き

調査票を、リエゾン G メンバーから調査協力者に手交し、配付・回収した。遠隔地に住まう調査協力者については、リエゾン G メンバーがメールの添付ファイルとして調査票を配布し、同様の方法で回収した。調査票にはインフォームドコンセントを添付し、目的、内容、参加の自由と不参加の不利益のないことを明示した。なお、調査期間は、平成 22 年 8 月 1 日から同 31 日であった。

③結果

1) 調査対象者

調査票の配布は 265 名に対して行ったが、そのうち回答が得られ、かつ、内容に大きな欠落がないものを選定した結果、最終的に分析対象となったのは 170 名であった。データ入力に当たっては、出口が作成したデータシートについて、メンバーの中でパソコン操作に慣れているものが分担することとなり、内容を精査しつつ入力を行った。その際、アンケート調査の個人情報を保

護するため、メンバーが所有するインターネットに接続しているパーソナルコンピュータの使用は認めず、別途、スタンドアロンのパソコン、プリンターをメンバーに貸与して作業に当たった。

有効回答が得られた調査対象者数とその男女別の内訳は表 3 に示したとおりである。

表 3 調査対象者人数とその内訳

	参加人数(人)
全体	170
男	73
女	97

2) 調査結果

各質問項目と回答方式、その結果については以下に示したとおりである。

問 1：今、お子さんに対して何か期待をお持ちですか。

(単一回答)

表 4 問 1 の回答結果

		強い期待を 持っている	かなり期待を 持っている	どちらとも言えない	あまり期待して いない	まったく期待して いない
全体	対参加人数(N=170)	35	59	73	3	0
		20.6%	34.7%	42.9%	1.8%	0.0%
男	対参加人数(N=73)	20	24	28	1	0
		27.4%	32.9%	38.4%	1.4%	0.0%
女	対参加人数(N=97)	15	35	45	2	0
		15.5%	36.1%	46.4%	2.1%	0.0%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、下段は横計パーセントを示している。

表 4 から、「子どもに対する期待」について、全体では、「どちらとも言えない」が 42.9%と最も高いが、「強い期待を持っている」が 20.6%、「かなり期待を持っている」が 34.7%であり、これらを合わせた「期待を持っている」群（以下同様）を見ると過半数を超えている。

男女別にみると、「どちらとも言えない」とする者の選択比率は、男性が 38.4%、女性が 46.4%と女性の方が高く、一方、「期待を持っている」群の選択比率は、男性の方が女性よりも高くなっている。

問2: どのような事柄に期待をお持ちですか。

(上限のない複数回答)

表5 問2の回答結果

		幸福になる こと	特定の職業に 就くこと	健康である こと	能力に関する こと	性格に関する こと	その他
全体		135	26	141	47	42	30
	対参加人数(N=170)	79.4%	15.3%	82.9%	27.6%	24.7%	17.6%
	対答総数(N=421)	32.1%	6.2%	33.5%	11.2%	10.0%	7.1%
男		58	8	55	20	16	12
	対参加人数(N=73)	79.5%	11.0%	75.3%	27.4%	21.9%	16.4%
	対答総数(N=169)	34.3%	4.7%	32.5%	11.8%	9.5%	7.1%
女		77	18	86	27	26	18
	対参加人数(N=97)	79.4%	18.6%	88.7%	27.8%	26.8%	18.6%
	対答総数(N=252)	30.6%	7.1%	34.1%	10.7%	10.3%	7.1%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表5から、「期待する事柄」について、全体では、「健康であること」が82.9%と最も多く、次いで「幸福になること」が79.4%となっており、この2つの事柄の選択比率が突出している。

こうした全体の傾向は、女性では同様であるが、男性の場合は、「幸福になること」が79.5%と最も多く、次いで「健康になること」が75.3%となっており、男女の回答に差が認められた。

問3: お子さんがこれから生きることになる未来の社会についてお考えになることはありますか。

(単一回答)

表6 問3の回答結果

		よくある	まあまあある	どちらとも言えない	あまりない	まったくない
全体		44	88	19	18	1
	対参加人数(N=170)	25.9%	51.8%	11.2%	10.6%	0.6%
男		20	36	8	8	1
	対参加人数(N=73)	27.4%	49.3%	11.0%	11.0%	1.4%
女		24	52	11	10	0
	対参加人数(N=97)	24.7%	53.6%	11.3%	10.3%	0.0%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、下段は横計パーセントを示している。

表6から、「未来の社会について考える頻度」について、全体では、「まあまあある」が51.8%と最も多く、次いで「よくある」が25.9%となり、これらを合計した未来の社会について考えることがある者の回答比率が約80%となっている。

この傾向は男女別に見ても同様であるが、「よくある」とするものが、男性では 27.4%、女性では 24.7%と、男性の方が高くなっている。

問 4：未来の社会は現在とどのような点で違うと思われますか。

(自由記述)

表 7 問 4 の回答結果

		記述あり	記述無し
全体		140	29
	対参加人数 (N=169)	82.8%	17.2%
男		59	13
	対参加人数 (N=72)	81.9%	18.1%
女		81	16
	対参加人数 (N=97)	83.5%	16.5%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、下段は横計パーセントを示している。

表 7 から、「現在の社会との違い」について、全体でも、男女別に見ても、記述があった者の割合が 80%を超えている。

自由記述内容の一例は以下に示すとおりである（原文のまま引用）。

子どものコミュニケーション能力の問題、経済に状況についての不安、治安問題、環境問題などが取り上げられていることが多い。

(男性、会社員、子ども：一人)

人とのつながりとか、コミュニケーションのとり方ができるようになるか。携帯電話とかゲームの中で話すこと、自分の意見を伝えること、感情をあらわにしるとかできなくなるのではないかと考えるときがあります。

(女性、パート、子ども：一人、上記男性の妻)

子どもの年金のこと（年老いたとき、どれくらい年金という制度がよくなっているのか、わからないので不安）。子どもが 1 人なので、親の不安を背負わせないようにしていきたい。

(男性、会社員、子ども：二人)

国のトップが 1 年も持たずにコロコロ変わってしまう国だから、十数年先の社会がどうなっているか想像するのは難しい。ただ、生きていくこと自体が今よりもいろいろな意味で難しい社会になっていそう。

(女性、会社員、子ども二人、上記男性の妻)

就職が厳しくなっているだろうか。職を持っている人といない人の差が激しくなっていそう。

(男性、会社員、子ども二人)

日本の経済力を今日からみて 20 年後を考えた時、とても心配で予測不可。国がどこまで経済的に子どもの世代を支援できるのか不安。

(女性、会社員、子ども二人、上記男性の妻)

まず経済状況が今より厳しくなっているであろうこと。また自然環境も今より良くなっているとは考えにくい。

(男性、会社員、子ども一人)

貧富の差が大きくなっている。

(女性、会社員、子ども一人、上記男性の妻)

出来、不出来の差、特殊な能力を持つ子が出てくる一方、親離れできず甘やかされ続けて育ってしまった子の差が今以上に出るような気がします。今以上に便利な世の中になる一方、昔と比べ学校教育の場で先生が強く出られず、親御さん生徒が対等になってしまっただけでもありの世の中になってきてしまいそう。

(男性、会社員、子ども一人)

少子化、生活苦、ゆとりのない世界といったコミュニケーションがより希薄になる未来になると感じます。

(女性、会社員、子ども一人、上記男性の妻)

環境汚染や世知辛い世の中がもっとひどくなりそう。

特に日本は安全（海外と違って）と言われているが、どんどん海外と同じようになり、安全に歩くことができなくなるのではないかと思います。

(男性、会社員、子ども二人)

超高齢化社会、国際社会での日本の地位の低下

(女性、主婦、子ども二人、上記男性の妻)

高齢化社会が進み、負担大。環境悪化。

問 5：家庭・家族の中ではお子さんにどのようなことを期待されますか。

(上限のない複数回答)

表 8 問 5 の回答結果

		のびのびして 明るい	思ったことが 言える	親兄弟、家族 への思いやり	家族に悩みが 相談できる	兄弟の仲が 良い	その他
全体		140	105	117	107	91	24
	対参加人数 (N=170)	82.4%	61.8%	68.8%	62.9%	53.5%	14.1%
	対答総数 (N=584)	24.0%	18.0%	20.0%	18.3%	15.6%	4.1%
男		58	35	46	35	35	5
	対参加人数 (N=73)	79.5%	47.9%	63.0%	47.9%	47.9%	6.8%
	対答総数 (N=214)	27.1%	16.4%	21.5%	16.4%	16.4%	2.3%
女		82	70	71	72	56	19
	対参加人数 (N=97)	84.5%	72.2%	73.2%	74.2%	57.7%	19.6%
	対答総数 (N=370)	22.2%	18.9%	19.2%	19.5%	15.1%	5.1%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表 8 から、「家族の中での期待」について、全体では、「のびのびして明るい」が 82.4%と最も多く、次いで「親兄弟、家族への思いやり」が 68.8%、「家族に悩みが相談できる」が 62.9%となっている。

男女別にみても同様の傾向ではあるものの、全ての回答における選択比率が、男性より女性の方が高くなっているのが特徴的である。

また、男性と女性ともに、「のびのびして明るい」がそれぞれ 79.5%、84.5%と 1 位であることには変わりはないが、2 位以降では、男性では、「親兄弟、家族への思いやり」が 63.0%、次いで「思ったことが言える」・「家族に悩みが相談できる」が 47.9%と同率であるところ、女性では、「家族に悩みが相談できる」が 74.2%、次いで「親兄弟、家族への思いやり」が 73.2%となっており、男性と女性の回答に違いが出ている。

問 6：学校ではどのようなことをお子さんに期待されますか。

(上限のない複数回答)

表 9 問 6 の回答結果

		友達と楽しく過ごせる	活発で積極的	好奇心がある	相手の立場や場所をわきまえて行動できる	努力する	自分の意見や考えを持っている	先生を尊敬する	その他
全体	対参加人数(N=170)	144	76	91	117	108	96	46	11
	対答総数(N=689)	84.7%	44.7%	53.5%	68.8%	63.5%	56.5%	27.1%	6.5%
男	対参加人数(N=73)	56	30	39	44	34	32	16	5
	対答総数(N=256)	76.7%	41.1%	53.4%	60.3%	46.6%	43.8%	21.9%	6.8%
女	対参加人数(N=97)	88	46	52	73	74	64	30	6
	対答総数(N=433)	90.7%	47.4%	53.6%	75.3%	76.3%	66.0%	30.9%	6.2%
		20.9%	11.0%	13.2%	17.0%	15.7%	13.9%	6.7%	1.6%
		21.9%	11.7%	15.2%	17.2%	13.3%	12.5%	6.3%	2.0%
		20.3%	10.6%	12.0%	16.9%	17.1%	14.8%	6.9%	1.4%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択％、下段は横計パーセントを示している。

表 9 から、「学校での期待」について、全体では、「友達と楽しく過ごせる」が 84.7%と最も高く、次いで「相手の立場や場所をわきまえて行動できる」が 68.8%、「努力する」が 63.5%となっている。

男女別にみても同様の傾向ではあるものの、「その他」を除く全ての回答における選択比率が、男性より女性の方が高くなっているのが特徴的である。

また、男性・女性ともに、「友達と楽しく過ごせる」がそれぞれ 76.7%、90.7%と第 1 位であることには変わりはないが、2 位以降では、男性では「相手の立場や場所をわきまえて行動できる」が 60.3%、「努力する」が 63.5%の順となっているが、女性では、「努力する」が 76.3%、「相手の立場や場所をわきまえて行動できる」が 75.3%となっており、男性と女性の回答に違いが出ている。

問 7：友だちとの関わりに関してどのようなことを期待されますか。

(上限のない複数回答)

表 10 問 7 の回答結果

		多くの友 達と関わ れる	信頼関係 が築ける	仲良く遊 べる	自分の意 見が言え る	思いやり がもてる	悩みが相談で きる 友 達がいる	友達のため に何かが できる	その 他
全体	対参加人数 (N=170)	66	114	87	94	144	85	66	9
	対答総数 (N=689)	38.8%	67.1%	51.2%	55.3%	84.7%	50.0%	38.8%	5.3%
男	対参加人数 (N=73)	30	43	30	33	55	25	21	1
	対答総数 (N=238)	41.1%	58.9%	41.1%	45.2%	75.3%	34.2%	28.8%	1.4%
女	対参加人数 (N=97)	36	71	57	61	89	60	45	8
	対答総数 (N=427)	37.1%	73.2%	58.8%	62.9%	91.8%	61.9%	46.4%	8.2%
		9.9%	17.1%	13.1%	14.1%	21.7%	12.8%	9.9%	1.4%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択％、下段は横計パーセントを示している。

表 10 から、「友達の関わりにおける期待」について、全体では、「思いやりが持てる」が 84.7% と最も高く、次いで信頼関係が気づける」が 67.1%、「自分の意見が言える」が 55.3% となっている。

男女別にみても同様の傾向ではあるものの、「多くの友達と関わる」を除く全ての回答における選択比率が、男性より女性の方が高くなっているのが特徴的である。

また、男女別に見ても、1 位から 3 位までの順位は全体の傾向と一貫しているものの、4 位は、男性では「多くの友達と関わる」及び「仲良く遊べる」がともに 41.1% であるところ、女性では、「悩みが相談できる友達がいる」が 61.8% となっている。

問8：勉強ではどのようなことを期待されますか。

(上限のない複数回答)

表11 問8の回答結果

		よく できる	出来るに越した ことはない	適度 に できる	知的好奇心を持っ て取り組める	分からないところ を解決しようと する	努力 する	勉強の必要性が 理解できる	ある科目が 良くできる	その 他
全体	対参加人数(N=170)	21	96	11	83	84	66	41	8	10
	対答総数(N=420)	12.4%	56.5%	6.5%	48.8%	49.4%	38.8%	24.1%	4.7%	5.9%
男	対参加人数(N=73)	10	40	4	30	35	19	16	5	4
	対答総数(N=163)	13.7%	54.8%	5.5%	41.1%	47.9%	26.0%	21.9%	6.8%	5.5%
女	対参加人数(N=97)	11	56	7	53	49	47	25	3	6
	対答総数(N=257)	11.3%	57.7%	7.2%	54.6%	50.5%	48.5%	25.8%	3.1%	6.2%
		5.0%	22.9%	2.6%	19.8%	20.0%	15.7%	9.8%	1.9%	2.4%
		6.1%	24.5%	2.5%	18.4%	21.5%	11.7%	9.8%	3.1%	2.5%
		4.3%	21.8%	2.7%	20.6%	19.1%	18.3%	9.7%	1.2%	2.3%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表11から、「勉強への期待」について、全体では、「できるに越したことはない」が56.5%と最も高く、次いで「分からないところを解決しようとする」が49.4%、「知的好奇心を持って取り組める」が48.8%となっている。

男女別に見ると、男性は全体の傾向と一致しているが、女性では、2位が「知的好奇心をもって取り組める」で54.6%、3位が「分からないところを解決しようとする」となっている。男性と女性の回答比率に大きな違いがあるのが、「努力する」であり、男性は26.0%であるのに対し、女性では48.5%となっている。

問 9：能力においてはどのようなことを期待されますか。

(上限のない複数回答)

表 12 問 9 の回答結果

		好きなことは 可能性をのば すことができる	信頼関係 が築ける	仲良く 遊べる	自分の 意見が 言える	思いやり がもてる	悩みが相談 できる 友達がいる	友達のため に何かが できる	その 他
全体	対参加人数(N=170)	125	73	106	103	70	69	45	6
		73.5%	42.9%	62.4%	60.6%	41.2%	40.6%	26.5%	3.5%
男	対参加人数(N=73)	49	24	46	35	28	24	14	2
		67.1%	32.9%	63.0%	47.9%	38.4%	32.9%	19.2%	2.7%
女	対参加人数(N=97)	76	49	60	68	42	45	31	4
		78.4%	50.5%	61.9%	70.1%	43.3%	46.4%	32.0%	4.1%
	対答総数(N=597)	20.9%	12.2%	17.8%	17.3%	11.7%	11.6%	7.5%	1.0%
	対答総数(N=222)	22.1%	10.8%	20.7%	15.8%	12.6%	10.8%	6.3%	0.9%
	対答総数(N=375)	20.3%	13.1%	16.0%	18.1%	11.2%	12.0%	8.3%	1.1%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表 12 から、「能力における期待」について、全体では、「好きなことは可能性を伸ばすことができる」が 73.5%と最も高く、次いで「仲良く遊べる」が 62.4%、「自分の意見が言える」が 60.6%となっている。

男女別に見ると、男性は全体の傾向と一致しているが、女性では、2位が「自分の意見が言える」で 70.1%と 1位に迫る選択比率となっており、3位が「仲良く遊べる」で 61.9%となっている。男性と女性の回答比率に大きな違いがあるのが、「信頼関係が築ける」であり、男性は 32.9%であるのに対し、女性では 50.5%となっている。これ以外でも、「悩みが相談できる友達がいる」では、男性が 32.9%であるのに対し、女性では 46.4%であり、男女の回答に違いが見られた。

問 10：住んでいる地域との関わりではどのようなこと期待されますか。

(上限のない複数回答)

表 13 問 10 の回答結果

		挨拶などができ マナーが守れる	友達と外で 遊べる	地域の人と仲良く 交わることができる	助け合 える	リーダーシップが 取れる	その 他
全体	対参加人数 (N=169)	154 91.1%	101 59.8%	76 45.0%	89 52.7%	17 10.1%	9 5.3%
	対答総数 (N=446)	34.5%	22.6%	17.0%	20.0%	3.8%	2.0%
男	対参加人数 (N=72)	62 86.1%	37 51.4%	34 47.2%	32 44.4%	9 12.5%	3 4.2%
	対答総数 (N=177)	35.0%	20.9%	19.2%	18.1%	5.1%	1.7%
女	対参加人数 (N=97)	92 94.8%	64 66.0%	42 43.3%	57 58.8%	8 8.2%	6 6.2%
	対答総数 (N=269)	34.2%	23.8%	15.6%	21.2%	3.0%	2.2%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表 13 から、「地域とのかかわりにおける期待」について、全体では、「挨拶などができマナーが守れる」が 91.1%と最も高く、次いで「友達と外で遊べる」が 59.8%、「助け合える」が 45.0%となっている。

男女別に見ると、女性は全体の傾向と一致しているが、男性については、3位が「地域の人と仲良く交わることができる」となっており、男女の回答に違いが見られた。また、「助けあえる」では、男性が 44.4%であるのに対し、女性は 58.8%であり、選択比率に大きな違いが見られた。

(上限のない複数回答)

表 14 問 11 の回答結果

		大人の言う ことが 聞ける	敬意を持ち 礼儀正しく できる	いろいろな知 識や考えを 吸収できる	責任ある 行動が できる	物怖じしないで 関われる	困ったことは お願いできる	その 他
全体	対参加人数 (N=169)	52	131	95	60	38	71	5
	対答総数 (N=452)	30.8%	77.5%	56.2%	35.5%	22.5%	42.0%	3.0%
男	対参加人数 (N=72)	20	58	37	22	15	23	1
	対答総数 (N=176)	27.8%	80.6%	51.4%	30.6%	20.8%	31.9%	1.4%
女	対参加人数 (N=97)	32	73	58	38	23	48	4
	対答総数 (N=276)	33.0%	75.3%	59.8%	39.2%	23.7%	49.5%	4.1%
		11.5%	29.0%	21.0%	13.3%	8.4%	15.7%	1.1%
		11.4%	33.0%	21.0%	12.5%	8.5%	13.1%	0.6%
		11.6%	26.4%	21.0%	13.8%	8.3%	17.4%	1.4%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表 14 から、「大人との関わりにおける期待」について、全体では、「経緯を持ち礼儀正しくできる」が 77.5%と最も高く、次いで「いろいろな知識や考えを吸収できる」が 56.2%、「困ったことはお願いできる」が 42.0%となっている。

男女別にみても同様の傾向ではあるものの、3 位の「困ったことはお願いできる」について、男性が 31.9%であるのに対し、女性は 49.5%と約 17 ポイント高くなっていることが特徴的である。

問 12：一般社会との関わりではどのようなことを期待されますか。

(上限のない複数回答)

表 15 問 12 の回答結果

		社会的出来事に 関心がある	ニュースや新聞から社会を 理解できる	社会のルール が守れる	何かの役に 立つ	自分らしくのび のびと出来る	その他
全体		67	63	147	43	80	5
	対参加人数 (N=168,169)	39.9%	37.3%	87.0%	25.4%	47.3%	3.0%
	対答総数 (N=405)	16.5%	15.6%	36.3%	10.6%	19.8%	1.2%
男		28	27	60	19	31	2
	対参加人数 (N=71,72)	39.4%	37.5%	83.3%	26.4%	43.1%	2.8%
	対答総数 (N=167)	16.8%	16.2%	35.9%	11.4%	18.6%	1.2%
女		39	36	87	24	49	3
	対参加人数 (N=97)	40.2%	37.1%	89.7%	24.7%	50.5%	3.1%
	対答総数 (N=238)	16.4%	15.1%	36.6%	10.1%	20.6%	1.3%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表 15 から、「一般社会との関わりにおける期待」について、全体では、「社会のルールが守れる」が 87.0%と最も高く、次いで「自分らしくのびのびとできる」が 47.3%、「社会的出来事に関心がある」が 39.9%となっている。

男女別にみても 1 位から 3 位までの順序は変わらないが、女性の方が選択比率が高くなっているところが特徴的である。

問 13: 異文化や自分と違う文化を持つ人々とはどのような関わりを期待されますか。

(上限のない複数回答)

表 16 問 13 の回答結果

		互いの文化の違いが分かる	互いを尊重し、受容しあえる	関わり、コミュニケーションができる	自分がない、相手の良いものを学ぶことができる	必要な時こちらの文化を相手に教えてあげることができる	その他
全体	対参加人数 (N=169)	71	114	101	95	44	7
	対答総数 (N=452)	42.0%	67.5%	59.8%	56.2%	26.0%	4.1%
男	対参加人数 (N=72)	36	45	43	34	13	1
	対答総数 (N=172)	50.0%	62.5%	59.7%	47.2%	18.1%	1.4%
女	対参加人数 (N=97)	35	69	58	61	31	6
	対答総数 (N=260)	36.1%	71.1%	59.8%	62.9%	32.0%	6.2%
		13.5%	26.5%	22.3%	23.5%	11.9%	2.3%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表 16 から、「異文化等々の関わりにおける期待」について、全体では、「互いを尊重し、受容しあえる」が 67.5%と最も高く、次いで「関わり、コミュニケーションができる」が 59.8%、「自分がない相手のよいものを学ぶことができる」が 56.2%となっている。

男女別にみても 1 位については同様であるが、男性では、「関わり、コミュニケーションができる」が 59.7%と 2 位になり、3 位は「互いの文化の違いがわかる」50.0%となっているのに対し、女性では、「自分がない相手のよいものを学ぶことができる」が 62.9%と 2 位になり、3 位は「関わり、コミュニケーションができる」59.8%となっており、男性と女性の回答傾向に違いが見られた。

問 14: パソコンや携帯、その他 IT(情報処理)能力に関してはどのような期待をお持ちですか。

(上限のない複数回答)

表 17 問 14 の回答結果

		必要最小限の 技能を持つ	平均並みに 使える	専門的な技能 を 身につける	情報モラルを 守る	他のことに興 味を持つことを 妨げない程度 に用いる	その他
全体		31	118	16	76	34	9
	対参加人数(N=170)	18.2%	69.4%	9.4%	44.7%	20.0%	5.3%
	対答総数(N=284)	10.9%	41.5%	5.6%	26.8%	12.0%	3.2%
男		12	48	11	30	13	7
	対参加人数(N=72)	16.7%	66.7%	15.3%	41.7%	18.1%	9.7%
	対答総数(N=121)	9.9%	39.7%	9.1%	24.8%	10.7%	5.8%
女		19	70	5	46	21	2
	対参加人数(N=97)	19.6%	72.2%	5.2%	47.4%	21.6%	2.1%
	対答総数(N=260)	11.7%	42.9%	3.1%	28.2%	12.9%	1.2%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、中段は回答者の選択%、下段は横計パーセントを示している。

表 17 から、「IT 能力における期待」について、全体では、「平均並みに使える」が 69.4%と最も高く、次いで「情報モラルを守る」が 44.7%、「他のことに興味を持つことを妨げない程度に用いる」が 20.0%となっている。こうした傾向は、男女別に見ても同じである。

ただし、1 位、2 位についてはある程度高い選択比率となっているが、3 位については、男性で 18.1%、女性で 21.7%と低くなっているのが特徴的である。

問 15：その他、上で書ききれなかったことを以下に自由にお書きください。

(自由記述)

表 18 問 15 の回答結果

		記述あり	記述無し
全体	対参加人数(N=170)	32	138
		18.8%	81.2%
男	対参加人数(N=73)	9	64
		12.3%	87.7%
女	対参加人数(N=97)	23	74
		23.7%	76.3%

注：全体・男・女のセルの上段は回答者数（単位は人）、偲団は回答者比率の横計パーセントである。

表 18 から、自由記述があつたのは、全体で 18.8%、男性で 12.3%、女性で 23.7 とあまり多くはなかつた。

自由記述の例は以下に示すとおりである（原文のまま引用）。

(男性、会社員、子ども一人)

子どもは未来からの預かり物という意識を日々強く感じます。それとともに、この子どもたちに「何を残してあげられるのか」を自らに日々問いかけています。

(男性、会社員、子ども二人)

日本のみという狭い視野ではなく、世界に目を向けることができる人間になってほしい。

(男性、会社員、子ども一人)

学校教育の在り方として、こどもが授業を受けることでスキルでも知識でも何かしら積み上げることを期待したい。授業という時間を消費することが教育になっている気がする（特に義務教育のこの傾向が強い）。

小学校での吸収力に比べて、中学、高校、大学と新しい知識を得ることの喜びなどが希薄となって詰め込むことを行い、テストでの結果が全てとなる。プロセス（知識を吸収するということを含めて）を楽しむことのできる子どもが非常に少ないように思う。

これからの学校教育は、知識を吸収し、利用してまた吸収するという発信を含めた教育にチャレンジしていくべきだと思うし、そうでなければ未来は暗いものになるように思う。

(女性、会社員、子ども一人、上記男性の妻)

良い先生に、よい友達に恵まれて過ごしてほしい。

たとえ挫折が合っても親や友達に相談できる強い心の持ち主になってほしい。

今の時代、女の子も男の子同様に働くのが当たり前になってきているので、厳しい世の中になってきているので、女の子だからといって甘えた感覚にならないでほしい。

何事もアクティブに前向きに考えられ、行動できる子になってほしい。周りに流されず、自分をもって行動してほしい。

(女性、会社員、子ども一人)

ひとりひとりパソコンや携帯は持っているのが当たり前の時代ですが、人とのコミュニケーションがとれなくなるので、その辺をパソコンでも学びやすいシステムを作ってほしいです。

子どもでもすんなりとパソコンを扱うことができるようになるのは少し複雑な気持ちになりますが、今、小学校の授業でも行っているの、やはり平均並みには使用できるのは理想なのかもしれません。

(女性、派遣社員、子ども二人)

子どものことに勝手に期待をかけるのは、親のエゴ以外の何物でもないと思います。

子どものことをとやかく言う前に、私自身、親としての努力を怠っていないか、今一度反省したいと思います。(今回のアンケート調査は)、自分を考えるよいきっかけになりました。

(女性、無職、子ども二人(双子))

男の子なので小さいうちは体をいっぱい使って外で遊び、学生時代は一生懸命勉強していい大学に行ってもらいたい。

双子なので、お互いが切磋琢磨して向上し、大人になっても何でも話し合えるような仲の良い兄弟に育ててほしい。努力も苦労も必要だけど、健康面では苦労させたくない。

(4) まとめと考察

以上の結果を各表ごとにまとめると、次のようなことが指摘できる。

①調査協力者(表3)

調査参加者は、男性よりも女性の方が多かった。今回の調査は、男性(父親)と女性(母親)の未来に生きる子どもに対する期待の違いも明らかにすることを視野に入れているため、男女(父親、母親)セットでの配布を依頼したが、調査票の配付は、全てメンバーの女性が行い、配布対象者も女性(母親)であったとのことであるので、パートナーである男性(父親)まで調査票が到達していなかったことが推測できる。ただし、メンバーが参加者からヒアリングしたところによると、男性(父親)は仕事に追われており、回答したいという気持ちはあっても、なかなか時間に余裕がなく回答できなかったというケースもある。

②子どもに対する期待(表4)

男女(父母)ともに、子どもに対する何らかの期待を持っている者が多いことは明らかである。ただし、女性(母親)の方が男性(父親)に比して、「どちらとも言えない」という期待感を肯定も否定もしない回答が多いことは特徴的である。わずかではあるが「あまり期待していない」という回答も女性(母親)が多いことを考え合わせると、男性(父親)より女性(母親)

の方が子どもに対する期待感は抑制的であると考え合わせる。

③子どもに対する期待する事柄（表5）

男女（父母）ともに、子どもには健康で幸福に育ててほしいと期待している者が多いことがわかる。男女（父母）別にみると、最も期待を寄せているものが、男性（父親）では幸福、女性（母親）では健康であり、多少の違いは認められた。他方、特定の職業に就くことや能力や性格についてはあまり期待をしていないが、これは今回の調査が、幼児を持つ男女（父母）に回答を求めていることから、まずは健康や幸福という抽象的で大きな概念が選択された結果と考えるべきであろう。

④未来の社会について考える頻度（表6）

男女（父母）ともに、「よくあるとする者」、「まあまああるとする者」の合計が約80%となるなど、非常に多くの者が、子どもがこれから生きていかなければならない将来の社会について考えていることがわかる。

⑤未来社会の現在との違い（表7）

80%を超える男女（父母）が自由記述を行っており、こうした問題への関心の高さがうかがい知れる。記載内容は、子どものコミュニケーション能力についてや将来の経済状態に対する不安、治安問題、環境問題など多岐にわたっているところ、そのほとんどが未来を悲観するものばかりである。子どもにとって、現在より未来が安寧で安定している、さらに生きやすくなっているという記述はごくわずかであった。現在の社会生活上の不安が、将来一層深刻化するのではないかという心理が反映されていると考えられる。

⑥家庭・家族の中での期待（表8）

男女（父母）ともに、のびのびして明るく育ててほしいと願っており、相互に思いやりを持ち、悩みを打ち明けられ、思ったことが言えるような暖かく風通しのよい家族を理想としていることがわかる。

⑦学校での期待（表9）

男女（父母）ともに、友達と楽しく過ごすことができ、わきまえた行動をすること、努力することなどに期待を寄せている一方、教師を尊敬することに期待を寄せる者が男女（父母）とも非常に少ないことは特徴的である。理由の詳細は更問の設定がないので不明であるが、学校や教師という者に対する信用が失墜しているとも見られる。

⑧友だちとの関わりにおける期待（表10）

男女（父母）ともに、思いやりをもって信頼関係を築きつつ、自分の主張もできる子どもになってほしいという願いが強い。こうした中で、多少質問は異なるが、「家族の中での期待」や「学校での期待」でも期待されているのが、自己主張ができるという点である。コミュニケーション能

第12章 未来に生きる健やかなこどもの姿

力を高める中で、一方的に人の主張を受け入れるのではなく、自己主張もきちんとできるようになってほしいという願いが強いものと考えられる。

⑨勉強への期待（表11）

男女（父母）ともに、よくできることを期待する者は少なく、できるにこしたことはない程度の期待をする者が最も多い。現在の保護者には学業成績を偏重する考え方は少ないことが分かる。しかし、決してできなくてもよいと思っているわけではなく、分からないところを分からずじまいにしないことや知的好奇心をもって取り組むことは重要であると考えている。また特に女性（母親）は、努力することに価値を置いている傾向がある。

⑩能力における期待（表12）

男女（父母）ともに、好きなことで可能性を伸ばすことができるようになってほしいという期待が最も強く、個性を尊重した期待感とも考えられる。また、仲良く遊べるというコミュニケーション能力に対する期待が高いが、他方、友達のために何かできるということについての期待は低いので、互恵的観点からのコミュニケーション能力を期待しているわけではないことがわかる。男女（父母）別では、男性（父親）に比して女性（母親）の方が、信頼関係を築けたり、悩みが相談できることに期待感が強い。

⑪地域との関わりにおける期待（表13）

男女（父母）ともに、挨拶ができたりやマナーを守れるようになってほしいとの道徳や規範意識に係る期待感が強く、その他、友達と外で遊べたり、助け合えたりできるようになってほしいという期待感が強い。男女（父母）別にみると、男性（父親）の方が地域の人との交流を期待しており、女性の方は「助けあえること」に期待感が強い。

⑫大人との関わりにおける期待（表14）

男女（父母）ともに、大人に対して経緯を持って礼儀正しくあってほしいという期待感が最も強く、また、大人から色々な知識や考えを吸収しつつ、困った時は頼りにしてほしいという期待がある。男女別（父母別）では、男性（父親）に比して、女性（母親）の方が、困ったときに頼りにしてほしいという期待が強いのが特徴的である。

⑬一般社会との関わりにおける期待（表15）

男女（父母）ともに、社会のルールが守れるようになってほしいという規範意識に係る期待が最も強い。他方、何かの役に立ってほしいという期待感が低いことは、能力における期待で、友達のために何かできるようになってほしいという期待が低かったことと同様、互恵的な観点があまり認められないことが特徴的である。

⑭異文化等との関わりにおける期待（表16）

男女（父母）ともに、お互いを尊重・受容し、コミュニケーションができるようになってほしい、その中で、自分にはないものを学んでほしいとする期待感が強い。一方で、文化の違いを理解したり、こちらの文化を教えることにはあまり期待感がないことは、異文化コミュニケーションを行う上で支障となる問題点も浮き彫りにされている。

⑮IT能力における期待（表17）

男女（父母）ともに専門的な知識を身につけてほしいとまでは思っておらず、平均並みに使えるようになってほしいと期待し、情報モラルを守れるようになってほしいと期待している。

⑯その他（表18）

男女（父母）ともに、80%前後の者が記入していない。これは、質問1から同14までが、未来に生きる健やかな子ども像について、ほとんどの領域をカバーしていることから、さらに自由記述で記入することは少なかったのではないかと推測できる。

ベネッセ次世代育成研究所（2010）は、幼児の生活アンケートを東京を含むアジア5都市（東京、ソウル、北京、上海、台北）で行い、幼児の生活の様子や保護者の子育て意識について調査している。その中で、とりわけ東京の母親の子育て意識を見ると、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になる」という質問項目において、63.5%が心配になると回答しており、また、「お子様に将来どのような人になってほしいと思いますか」という質問項目において、「自分の家族を大事にする人」が72.4%で最も多く、次いで「友人を大切にする人」が71.6%、「他人に迷惑をかけない人」が65.6%となっている。こうした結果は、本調査の結果とも符合する部分が多い。

こうした結果や考察についての公表については、調査協力者に対する個別フィードバックはもちろんのこと、今後のリエゾンGでディスカッションするとともに、第14回リエゾン会議から話し合われたリエゾンGホームページにおいていずれ公表していく予定である。

（4）東京未来大学リエゾングループ主催シンポジウムの開催

①シンポジウム開催の経緯

（3）のアンケート調査の回収が終わったリエゾン会議の第11回頃から、リエゾンGとして対外的に成果を公表するような活動を行いたいという意見が出始め、その中で、シンポジウムの開催についての検討が始まった。

シンポジウム内容については、当初子育てに関するものや、アンケート調査にならって、未来に生きる子ども像をテーマとして開催するという意見が中心であった。しかし、開催時期を平成22年12月頃とするという時間的な制約やメンバーの中にシンポジウムにおけるシンポジスト経験のある者がいなかったことから、子育てや未来に生きる子ども像といった漠然としたテーマでのシンポジウム開催は難しいということになった。

そこで、今回は、純粋なシンポジウムというよりも、講演会と質疑応答をセットにしたものとすることになり、平成21年度内閣府青少年健全育成全国大会シンポジストや全国青少年補導セ

第 12 章 未来に生きる健やかなこどもの姿

ンター全国大会の記念講演を始め、全国各地で防犯に関する講演を行っている出口が、今回のシンポジウムでも基調講演を行うこととなった。

②シンポジウム開催の準備

平成 22 年 9 月の第 11 回リエゾン G 会議において発議されたシンポジウムの開催について、第 12 回から第 15 回のリエゾン G 会議において、シンポジウム当日の準備について話し合われた。会場は東京未来大学未来ホールとすること、日時は平成 22 年 12 月 6 日（月曜日）とすること、参加者の子どもの保育については特設保育室等の準備はしないものの、会場内に子どもを連れてくることを可とすることなどが話し合われた。

なお、本シンポジウム開催に当たり、東京未来大学の所在する東京都足立区の治安再生戦略会議が進めるビューティフルウィンドウズ運動の後援名義を足立区役所からとりつけた。この足立区治安再生戦略会議において、出口は「足立区防犯専門アドバイザー」に任命されており、足立区の防犯について積極的な支援と理論的指導を行っている。

広報面ではポスター作りをメンバーの一人が中核的に行い、完成後はメンバーが近隣に配付しながら参加者の募集を行った（ポスターは図 2 に示したとおりである）。また、東京未来大学のホームページ、足立区役所のホームページでもちらし掲載を行い、加えて、当日のシンポジウムの様子をライブ配信する早稲田総研インターナショナルの協力も得てそのホームページでも広報を行った。この早稲田総研インターナショナルは、インターネットを経由して講演等をライブで配信するとともに、同時にツイッター等を用いて、その場で遠隔地にいるシンポジウム参加者からの質問等を受け付け、それをシンポジウム内にフィードバックするシステムを用いており、これによって、当日会場に来場できない人もシンポジウムに参加できるようになった。従来のシンポジウムは、会場に来場しないと参加できなかったが、この早稲田総研インターナショナルのシステムを用いることによって、全国どこにいても時間さえ許せばシンポジウムに参加できるという、シンポジウムの開放性を一層高めることができた。

図2 シンポジウムのポスター

東京未来大学 リエゾングループ主催

公開講座

子どもをまもれ! 攻める防犯

テレビでおなじみ! **出口 保行 先生** 東京未来大学 こども心理学部教授
プロフィール

1985年、東京学芸大学大学院修了後、国家公務員上級(A種)心理職として法務省入省。主に少年鑑別所、刑務所等において犯罪を心理学的に分析する資質 鑑別に従事。法務省では、国連研修への参加や米国派遣など様々な経験をなさっております。専門は犯罪心理学で、犯罪者の共感性の構造を研究。現在は、足立区防犯専門アドバイザーとして、足立区のビューティフルウィンドウズ運動(治安再生運動)において学術的な指導を行い、長年、都下の治安ワースト1であった足立区をワースト1から脱却させています。最近では日本テレビ「DON!」にて「しくさからわかるその人の本音」や「性格診断」などを解説なさっております。
【主著】

日時: 2010年12月6日(月) 10:30~12:00
(受付開始9:50より)

会場: 東京未来大学 みらいホール
(東京都足立区千住曙町34-12)



参加費: 無料

当日の様子はインターネットで同時配信されます
<http://www.ustream.tv/channel/adachi-bohan>

お子様連れO.K. (保育はありません)
※席に限りがございますので、ご入場は先着順となりますがご了承ください。

リエゾングループとは・
東京未来大学周辺地域に住む母親10名の集まりです。月に1度、子どもに関わること全般について話し合いや情報交換をして日々の育児に生かしております。今回は周辺地域で自分たちでできることがないかと考えた初の主催イベ

予約・問合せ
e-mail: laison.tokyoimirai@gmail.com
住所・氏名・お子様連れかどうか(席数に限りがあるため)ご記入の上、送信をおねがします。

後援 足立区危機管理室 ビューティフルウィンドウズ運動

③シンポジウム当日

平成22年12月6日(月曜日)にシンポジウムが開催された。

当日は、メンバーは午前9時30分には会場に集合し、会場の設営や受付の準備等を行った。今回シンポジストを務めないメンバーが受付等の役割を担い、会場内での誘導等も行った。

会場参加者数は25名であり、インターネットによる参加者数は延べ100名を超えていた。

メンバーの一人が司会・進行役を務め、開会が宣言された後、リエゾンGについての説明がなされた。その後出口が1時間講演を行い、講演終了後、リエゾンGメンバー4名がシンポジストとして講演内容についての感想を述べるとともに、フロアを含めてディスカッションを行った。

なお、当日の様子は、早稲田総研インターナショナルの提供する
(<http://www.ustream.tv/recorded/11280620>) において常に公開されている。

講演の概要は当日配付した以下レジュメのとおりである。

=====

子どもを守れ！

攻める防犯 こどもを狙う犯罪者の心理

1 犯罪心理学とは

犯罪という行動の分析 犯罪者という人の分析 少年鑑別所・少年院

2 非行抑止・被害防止

本講演の目的：攻める防犯の確立 物理的な防犯・心理的な防犯

足立区ビューティフルウィンドウズ運動

3 我が国の犯罪情勢を把握する

犯罪・非行は社会の鏡 安全神話の崩壊 国民の治安認識 犯罪多発社会

【質問】

次の文章が、正しいと思えば○、間違っていると思えば×をつけて下さい。

問1 世の中でもっとも検挙人員の多い犯罪は、どろぼうである

問2 どろぼうの中で最も多い手口は空き巣である

問3 少年非行は、近年増加している

問4 少年による凶悪犯罪、とりわけ殺人は近年増加している

問5 少年非行の中で最も多いのは、中学生である

問6 年少者を狙った性犯罪は、午後5時台が最も起こりやすい

問7 年少者を狙った性犯罪は、公園で最も起こりやすい

問8 年少者を狙った性犯罪の対象に最もなりやすいのは5歳未満の幼児である

問9 強姦に比べて強制わいせつのほうが顔見知りによる犯行が多い

4 犯罪認識とその結果がもたらすもの

メディアが作る大人の不安と子どもの環境 培養分析 主観的現実

5 犯罪者と非犯罪者

何が犯罪か？ 動機と犯罪→リスクとコストで考える

6 攻める防犯

お金をかけない。活動に自信を持つ（未発生は統計に出ない）。

こどもを守るには何をすべきか、犯罪者の気持ちになって考える

=====

出口の講演終了後にシンポジストであるメンバー4名から、子どもをいかにして犯罪から守るかについてのコメントが出され、その後フロアーから、具体的に子どもを守るためにどのようにすればよいか等の質問が出て、シンポジストとの間で討議が行われた。

基調講演での出口の話題提供は以下のように要約される。

子どもを犯罪から守るためには、従来型の守る防犯から、積極的に攻める防犯に転じなければならない(出口、2010a, b, c)。そのためには現在の犯罪情勢を正確に知り、的確な対処が求められる。しかし、国民は、犯罪に関して正確な知識を持っていないことから(出口保行、2008b, c、2009b, c)、間違った知識に基づいて子どもを守ろうとする傾向が高い。犯罪についての質問への誤答率は 60%から 80%程度であると、前述した出口は報告している。例えば、子どもを性犯罪から守ろうとするとき、「夕方の公園が危ない」と考えられがちであるが、法務総合研究所(2008)によれば、実は子どもを狙う性犯罪者は、午後 3 時台の路上で子どもを待ち伏せし犯行に及んでいる。こうした保護者側の認識と現実の違いは、結局保護者をして「夕方の公園は危ないから早く帰ってらっしゃい」という指示につながり、本来子どもに伝えるべき「学校帰りは危ないから十分気をつけて」という指示につながらなくなってしまうのである。

こうした背景にあるのが、メディアからの影響であり、日々、テレビやインターネットを通して犯罪報道に触れることの多い人ほど、主観的現実を形成しやすく、犯罪についての思い込みが強くなってしまっている。夕方の公園が危ない」というのも、この思い込みに支配されているものである(出口、2010a)。

さて、出口(2010a)によれば、犯罪生起を考えると、動機形成と犯罪発生が密接しているように思われがちである。しかし、動機形成のレベルは、非犯罪者であっても誰にでもあることであり、その犯行が実行されて初めて犯罪が成立するのである。動機形成から犯行実行までの間には、何百回、何万回という意味決定と行動化というプロセスをたどり、その意思決定の全てにおいてイエスを選択した場合のみ犯行が成立する。

こうしたことから、犯罪者の意思決定と行動化のどこかで杭を打ち込むことによって犯罪の生起を未然に防止することができるようになるのである。

犯罪者であってもなくても、通常我々は犯罪行為を行う際に、常にリスクとコストを考えている。ここでいうリスクとは、検挙されるリスク、コストとは検挙されることによって失うものの大きさを意味している。つまり、逮捕されるリスクが大きく、失うものが大きければ犯罪は起こらないという理論である。こうした考え方にのっとり、施策を展開しているのが、本学の所在する東京都足立区である。

足立区はいち早く犯罪を起しにくい街づくりを提唱し、その理論的背景を構築しているのが出口である。この施策は「ビューティフル・ウィンドウズ」運動と呼ばれ、街をきれいにしておくことによって、犯罪者の流入を防ごうとしたものである。この理論的背景が本公園のタイトルにもなっている「攻める防犯」という考えかたである。

こうした理論を使って街づくりに積極的に取り組んでいるのが、京都府である。京都府の現状調査や情報収集を行うため実地調査に 3 回(2008 年 11 月 21 日—23 日、2009 年 12 月 11-14 日、2010 年 2 月 27 日—3 月 2 日)赴いた。そこでは、街の繁華街にある落書きを消すことによって環境美化を図るという「割れ窓理論」を援用した運動が展開されている。京都府知事が先頭に立ち(写真 3)、人の手を使って街のいたるところにある落書きを消す作業は非常に非効率的にも思えるが、実はそうした取り組みを行っているということ自体が社会に広まることによって、犯罪者に対しては、「防犯に積極的な街」というイメージを与え、犯行を抑止することにつながるのである(出口、2009a、2009b、2010a、2010b)。

この割れ窓理論とは、出口（2008）によれば、ウィルソンとケリング（1982）が提唱した防犯理論であり、街の環境美化を保つことが犯罪者流入を防止するというものである。環境犯罪学という分野で主に研究されている。



写真3 京都府知事による落書き消しの現場（2009年12月13日撮影）

まずは犯罪について正確な知識を持ち、どのようなことが犯罪に者にとって「嫌がらせ」になるかを考えて、今後の防犯＝「攻める防犯」を展開していくべきである。

③シンポジウム後のアンケート調査結果

シンポジウムにおいて、メンバーがまとめた出席者のアンケート結果は表19に示すとおりである。

「参加の友達に誘われて」が69%と最も多く、主体的に来場したわけではないことがうかがわれるが、一方で「またこうした公開講座に参加したい」と思った者が同様に69%であり、満足度の高いシンポジウムが開催できたと考えられる。なお、アンケートの自由記述欄に書かれたコメントは以下のとおりである（原文のまま）。

○「攻める防犯」というキーワードにひかれて受講しました。大変興味深く、また初めて知る事実も多く勉強になりました。こういった情報が一般の人にフィードバックされ、地域の治安向上につながれば素晴らしいと思いました。今後取り上げてほしいテーマとしては、犯罪者の家庭環境について、子どもを犯罪加害者としないうちに家庭でできること。子どもが犯罪被害者にならせないためにというテーマはよくあるが、その逆はあまりないと思う。

○正確な情報が色々聞けてよかったです。テレビのニュースは野次馬的な事件報道ばかりのためにならないので見ないようにしています。情報源でいいものはないかなと常日頃から思

っています。今は新聞と本くらいです。文化の違う外国人は何をを考えているのかいまいちわからない。最近では外国人の犯罪も増えていると言われていたが、実際どうか分からない分、不安です。

○このような公開講座が大学で開催されること、ましては地域の主婦の方がリエゾングループとして活動していることに感動しました。今後ともこのような活動が継続されることを望んでいます。

○初めて防犯についての講義を聞くことができ、こどものいる私はとても勉強になりました。先生の話を知ると自分のおもっていた認識とずいぶん違っていたので驚きもありました。このような公開講座を開いていただきありがとうございました。もっと公開していただければ、沢山の人も知ってもらえるのでよいと思います。

また、シンポジウム後の反省会では、メンバーから、今後ともリエゾンGを継続して行いたいこと、シンポジウムも企画して新たな地域の要請に応えたいことなど前向きな発言が相次いで行われた。

2010年3月末までは、本科学技術研究費の助成を受けてリエゾンGを運営したが、その後も、その他の資金を用いてリエゾンGの運営は続けていくことが確認された。

なお、こうしたシンポジウム等の広報や情報交換の場としてリエゾンGのホームページの作成の必要性がここでも主張されたことから、今後本格的に取り組んでいきたい。

表 19 リエゾンGメンバー作成のアンケート調査結果

設問 1 本日はどのようなきっかけで公開講座にいらっしゃいましたか？

友達に誘われて	9 件	
ホームページをみて	2 件	
チラシをみて	2 件	(大学内、汐入にこにコス クール)

設問 2 今後、このような公開講座に参加したいと思いますか？数字を○で囲んでください。

選択数字	件数	割合
1	9	69%
2	2	15%
3	1	8%
4	0	0%
5	1	8%

参加したい 1 ⇔ 5 遠慮したい

設問 3 お子様連れを容認した公開講座でしたが、会場の雰囲気はいかがでしたか？

1	9	69%
2	2	15%
3	2	15%
4	0	0%
5	0	0%

よかった ⇔ 悪かつ
た

(5) 東京未来大学リエゾングループの今後

リエゾンGの活動は未だ緒に就いたばかりである。今後とも途切れることなく継続的に活動を受け、世に成果を問うていきたい（平成 22 年 4 月以降は、東京未来大学共同研究費を用いて活動を受け、さらに地域に根ざした活動を目指したい）。

については、今後も定期的にリエゾン会議を開催し続け、徐々にメンバー数を拡大することにより、より大きな活動としていくとともに、こうしたリエゾンGの活動を広く社会の中で認知してもらい、意見交換を行うため各種の情報発信を行いたい。

まずは、本報告書内で取りまとめた「未来に生きる子ども像に関する調査」の結果について、調査協力者に対してフィードバックし、また、シンポジウム・公開講座を開催して成果発表を行うことも視野に入れている。あるいは、先述したとおり、リエゾンGのホームページを立ち上げ活動の透明性や公益性を担保しつつ、大学周辺に居住しているか否かというような物理的距離にとらわれない活動の広がりを期待したい。

未来に生きる健やかなこどもの姿を考えると、将来を悲観するばかりではなく、今からできることは何か、どのような準備をしつつ来るべき未来に備えるかを考え続けることが必要であろう。高度情報化社会といわれる現在だけに、ICTなどを十二分に活用して、こうした子育てに係る保護者の不安を低減し、また明るく健全な子どもの育成に資することができれば幸いである。今後のリエゾンGの活動が一層活発になり、一層地域に根付いたものとなるように働きかけを続けていきたい。

3. 文献

- ベネッセ次世代教育研究所（2010） 幼児の生活アンケート 東アジア 5 都市調査 2010 レポート ベネッセコーポレーション
- 出口保行（2008a） 少年非行の心理 東京未来大学
- 出口保行（2008b） 犯罪認識と地域防犯に関する研究（1） 日本犯罪心理学会第 46 回総会発表論文集 144-145
- 出口保行（2008c） 犯罪不安と地域防犯に関する総合的研究（1） 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集 18
- 出口保行（2009a） 犯罪の心理 東京未来大学
- 出口保行（2009b） 犯罪認識と地域防犯に関する研究（2） 日本犯罪心理学会第 47 回総会発表論文集 95-96
- 出口保行（2009c） 犯罪不安と地域防犯に関する総合的研究（2） 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集 139
- 出口保行（2010a） 犯罪から子どもを守る大人の役割 坂元昂監修 こどもがみ・え・る 第 4 章 138-142 学研教育出版
- 出口保行（2010b） 犯罪不安と地域防犯に関する総合的研究（3） 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集 626
- 出口保行（2010c） 犯罪認識と地域防犯に関する研究（3） 日本犯罪心理学会第 48 y 回総会

第 12 章 未来に生きる健やかなこどもの姿

発表論文集掲載予定（大会発表は終了、現在印刷中）

法務総合研究所（2004） 平成 16 年版犯罪白書 法務省

法務総合研究所（2006） 平成 18 年版犯罪白書 法務省

法務総合研究所（2008） 平成 20 年版犯罪白書 法務省

法務総合研究所（2009） 平成 21 年版犯罪白書 法務省

警察庁生活安全局少年課（2010） 少年非行等の概要（平成 21 年 1～12 月） 警察庁記者発表資料

厚生労働省（2010） 平成 21 年 人口動態統計の年間推移 厚生労働省記者発表資料

謝辞

東京リエゾングループの諸氏におかれては、リエゾングループの立ち上げ、調査票の作成・配付・集計、シンポジウムの開催等について大変な御尽力をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。